若越郷土研究　六十五巻一号

坂井市の伝説と昔話（三）　―語れるものに―

杤谷洋子

はじめに

昔話は本来口で語られ耳で聞かれてきた。だから昔話の語り口（文）は黙読して読み楽しむ文学の文章とは違いシンプルでクリヤーである。今多く出版されている昔話絵本や昔話集では文学作品として昔話を再話したものが多い。それらは文学作品として黙読するときには楽しめるものだと思うが、それを昔話本来の口で語り、耳で聞くというようにすると疑問がのこる。

昔話集の中には伝承の語り手が語ったものをそのまま翻字して掲載したものもある。それは声で音読し耳で聞けば、その世界がはっきりイメージでき楽しめる。しかし黙読するとものたりなく面白くないと感じる。又、今私たちが目にすることができる昔話の資料の中には、テープレコーダーなどがない時代に聞き手があらすじだけを要約したり、または面白いと感じた部分を断片的に報告、記したというものがほとんどである（福井県の伝説や昔話はこれが多い）。

私は現代の語り手のひとりで、子どものころ昔話を聞いたことがない。現代の語り手は本の中に眠っている昔話やかけらを探し目覚めさせ（語れるものに再話し覚えて）声で語り、耳で聞くという昔話本来の姿に極力近づけようとしている。私は、小澤俊夫先生の「語り手はみな再話者である」ということばに共感し、長年先生の指導のもと、ふくい昔ばなし大学再話研究会で仲間たちと勉強してきた。

学んできた事をいかして、私は福井の伝説や昔話が現在黙読して楽しむ文体に再話され本に掲載されているものを、語り手が口で語り、聞き手が耳で聞いてイメージをひろげておはなしが楽しめるものに再再話し語っている。

今回は、坂井市の伝説と昔話から、坂井町の伝説・昔話「嫁さんのちえ」「春日の天狗松」、春江町の「川田のかっぱ」「仏飯のご利益」、三国町の「いけい話」「おはるきつね」の六話をそれぞれ①参

考にした原話②共通語（標準語）に再再話したもの③私の土地ことば（福井弁）に再話したものを報告する。

このうち、③土地言葉（福井弁）の再話は、二〇一六年坂井市の広報番組『坂井さんちのこっしぇるじぇ』（ケーブルテレビ）の『坂井さんちのちょっと昔の話』の中で放映されたものを一部みなおしたものである。二〇二〇年六月現在、YouTubeで一部映像とともにきくことができる。

一　坂井町の伝説と昔話

その1　嫁さんの知恵（嫁のちえ）

①原話

出典『続ふくいの民話』嫁のちえ〈坂井町〉

福井新聞社、一九八四年三月

文　広部英一、話者　牧野義則

むかしむかし、あるところにしゅうとめさんがいての。息子の嫁さんをにくらしおもてたもんやで、どうぞかして嫁さんをいじめてやろうと、あれこれ考えてたんやと。

ほんで、ある日のことやの。

魚のにたのを、ままのおかずにしたとき、しゅうとめさんは

「おめはこれでがまんしねの。」

っていうて、魚の頭を嫁さんにやったんやと。

魚の頭は、骨ばっかで、なあもくうとこがないさけ、嫁さんは困るやろとおもたんやの。

ほいたところが、嫁さんはにこにこと笑うて

「なにをいいなさるんやの、お頭さまをくださるなんて、ご先祖さまに申しわけないわの。」

っていうと、魚の頭にかぶりついて、うまそうに骨までねぶったんやと。

ほれをみたしゅうとめさんは、これはしっぱいしたとおもて、つぎの日には

「おめはこれでがまんしねの。」

っていうて、こんだは魚の尾っぽを嫁さんにやったと。

ほいたところが、嫁さんはまたにこにこと笑うて

「なにをいいなさるんやの、尾さま（王様）をくださるなんて、ご先祖さまに申しわけないわの」

っていうと、魚の尾っぽを、うまそうにねぶったんやと。

ほれを見たしゅうとめさんは、こんだも失敗したとおもてもて、魚の頭や尾っぽでだめなら、これではどうじゃとばかり、つぎの日には、魚の真中の身のとこを嫁さんにやったんやと。

ほいとこんだは、嫁さんはすこしも笑わんと、ウンともスンともいわんと、ただ、だまってしぶしぶ、まずそうにくたんやと。

ほれをみたしゅうとめは

「これはうまくいったわい、嫁は魚の真中のとこの身が、きらい

なんや。」
おもたんやと。
ほんで、ほれからというもんは、嫁さんは、ずうーっと、魚の真中のとこのうまーい身ばっかしくうことができたんやと。

②共通語（標準語）

再話　杤谷洋子（二〇一六年五月）

昔、あるところにひとりのおばあさんがありました。このおばあさんは、自分の息子の嫁のことがかわいくおもえずきにいりませんでした。
あるひ、おばあさんは、ごはんのおかずに魚を煮ました。おばあさんは嫁に魚の頭のところをやって
「おまえはこれでがまんしなさい」といいました。
すると、嫁はにこにこして
「いいえ、お義母さん。がまんなんていうことはありません。私みたいなものが魚のおかしらさんをいただけるなんて、もったいない。ご先祖さまに申し訳ないことです」といいました。そして、魚の頭にかぶりつき、おいしそうに、骨までしゃぶって食べました。おばあさんは
「ああ、しまった。失敗した。うちの嫁は魚の頭がすきだったのか」とくやしがりました。
それから何日かたって、おばあさんは又、魚を煮ました。おばあさんは、こんどは魚の尾っぽの方を嫁にやって
「おまえはこれでがまんしなさい」といいました。
嫁はまたまたにこにこして
「いいえ、お義母さん。がまんなんていうことはありません。私みたいなものが、魚の尾さま（王さま）をいただけるなんてもったいない。ご先祖さまに申し訳ないことです」といいました。そして嫁は、魚の尾っぽにかぶりつき、おいしそうに骨までしゃぶって食べました。おばあさんは
「ああ、しまった。また、失敗した。嫁は魚の尾っぽも好きだったのか」とくやしがりました。
それから、また、何日かたっておばあさんはおかずに魚を煮ました。そこでこんどは、魚の真ん中の身のところをやって
「おまえは、これでがまんしなさい」といいました。すると嫁は、こんどは少しも笑わないでだまって困ったような顔をしていました。そして、まずそうに、いやいや、魚の身をすこしずつ食べました。これをみたおばあさんは
「ああ、こんどはうまくいった。うちの嫁は魚の真ん中の身のところが嫌いなのだな」と思いました。
それからはおばあさんは、魚を煮ると、いつも、嫁に、魚のまん中の身のところをやりました。
だから、嫁はそれからずっと、いつでも魚の真ん中のおいしいところが食べらるようになったそうです。
そうらいべったりかっちんこ

③土地ことば（福井弁）

再話　朽谷洋子（二〇一六年五月・二〇二〇年一月）

むかぁしのぉ、あっとこに、ひとりのおばばちゃんがいたんやとの。ほのおばばちゃんは、我が息子の嫁さんのことが気にいらんかったさけんてかわいらしおもわんかっていつもかもたやにくたばっかしてたんやってぇの。

ある日おばばちゃんは、ままのおさいに魚を煮たんやと。おばばちゃんは、嫁さんに魚の頭んとこをやって

「おめはこれでがまんしねの」ちゅうたんやと。ほいたところが嫁さんはにっこにこして

「なーんもお義母さん。がまんなんてほんなことといわんといておくんなさいま。わちんてなもんがぁお頭（かしら）さんをいただけるなんてもったいない。ご先祖さまに申し訳ないわの」ちゅうと魚の頭にかぶりついて、骨までねぶって、うまそうに食うたんやとの。

おばばちゃんは、（あーしもた。おぞいことしてもた。うちの嫁さんは魚の頭んとこがすきやったんや）と思たんやと。

ほでから、また、おさいに魚を煮たとき、こんだ、おばばちゃんは魚の尾っぽのとこを嫁さんにやって

「おめはこれでがまんしねの」ちゅうたんやと。ほいたところが嫁さんはこんだもまた、にっこにこしてわろて

「なーんもお義母さん。がまんなんてほんなことといわんといておくんなさいま。わちってなもんが王〈尾〉さまをいただけるなんてもったいない。ご先祖さまに申し訳ないわの」ちゅうと魚の尾っぽんとこにかぶりついて骨までねぶってうまそうに食うたんやと。

おばばちゃんは、（あーしもた。またおぞいことしてもた。うちの嫁さんは魚のしっぽんとこもすきやったんや）と思たんやと。

ほでから、またしばらくして、おばばちゃんはままのおさいに魚を煮たんやと。ほんでこんだは嫁さんに魚の真ん中の身のとこをやって

「おめはこれでがまんしねの」ちゅうたんやと。

ほいたところがこんだは嫁さんはちっとも笑わんしひとことともしゃべらんと、ものごい顔していやいやまずそうに、魚の身をちびちび食うたんやと。

ほれをみたおばばちゃんは（あー、こんだうまいことといったわ。うちの嫁さんは、魚の真ん中の身んとこがきらいなんやな）と思たんやと。

ほんで、ほでからは、おばばちゃんは、おさいに魚を煮るっちゅうと、嫁さんには、魚の身んとこばっかやるようになったんやと。嫁さんは、ほでからっちゅうもんずうーっと、魚の真ん中んとこのうまーい身んとこを食うことができたんやってぇの。

そうらいべったりかっちんこ

その2　春日の天狗松

①原話

若越郷土研究　六十五巻一号

出典『ふるさと坂井町』「春日の天狗松」（大関公民館）
坂井中学校郷土文化研究委員会、一九八三年四月

大味上のお春日さんの広い境内の南側に、二抱え以上もある大きな一本松があった。遠くの東荒井や関からも見える大木で、いいもの好きの天狗さんのお目に止まり、どこからか空を飛んで来て、住みつくようになった。そこで、みんなは、「天狗松、天狗松」と呼んだ。

一方、本荘のお春日さんの真南の門前の畑の真中にも大きな一本杉があった。何百年とたち、この杉もやはり天狗さんのお気に入りで、この松と杉の間を往き来していた。

晩になると、高い一本松の上で、天狗さんは、「トトン、トン、トン」とのどかに太鼓を叩いていた。これを聞いて村人たちは、

「今夜も天狗さんがいい気持ちで太鼓を叩いている。きっといい事があるんにゃろう」と平穏無事を喜び合った。

そんな或る夏の夕方、太陽も西に落ち遊んでいた子どもたちは三々五々連れだって家へ帰って行った。

しかし、やんちゃできかん気の大助だけは、一人境内でぶらぶらしていた。

これを高い松の木の上から見ていた天狗さんは、

「この子は、一度しっかりこらしめておかんとどんな事を仕出かすかもしれん」と考え、さっと高い松の木から飛び降り、ぱっと隠れ蓑の袖でかくしてしまった。目の前が真暗になった大助はびっくりした。それで大声で叫んだが全く声が出ない。そのうちにとうとう体も疲れ、腹もすいてしまった。丁度その時、目の前へおいしいぼた餅がお皿いっぱい山盛りにして出された。大助は我を忘れて、幾つも幾つも頬張った。

一方大助の家では、提灯を持って家族が大助を探しに出かけた。お宮さんの草むらを探すと、そこにポカーンと口をあけ腑抜けになった大助が座りこんでいる。

父親が、「大助、大助。」と大声で呼んでも一向に返事をしない。見ると口のまわりには馬の糞がいっぱいついているではないか―。

「どすん」と背中を力いっぱいどやしつけると、我に返った大助は「わー」と泣いて、父親にしがみついた。村人達は「これはきっと天狗さんがこらしめたのに違いない」と言い合った。

この事があってからの大助は、全く人が変わったように、親や友だちの言うことを素直に聞くよい子になった。他の子どもたちもみんなきまりを守って、薄暗くなる前に家に入るようになった。

この天狗松は、終戦の頃からすっかり元気をなくし、枯れてしまい、そのわずかな木の根の跡も、昭和五七年の社会奉仕でなくなってしまった。〔大関公民館〕

②共通語（標準語）

再話　杤谷洋子（二〇一六年一月）

坂井町の大味上と本荘にはそれぞれ春日神社があります。　昔、大味上の春日神社の境内にはふたかかえもある大きな古い松の木が

一本たっていて、本荘の春日神社には門前の畑のまんなかに、やはりふたかかえもある大きな古い杉の木が一本たっていました。

あるとき、どこからか天狗が飛んできて、この松と杉を往き来しねぐらにするようになりました。

夜になると、天狗は、いつも高い一本松の上で

トトン、トントンとたいこをたたいていました。そこで村の人たちはこの松の木を「春日の天狗松」とよんでいました。

さて、村の子ども達はいつも、神社の境内にあつまっては天狗松の下であそんでいました。そして、ゆうがた、お日さまが西の空にしずむころになるとあそびをやめ、家へかえっていくのでした。ところが、きかんぼうの大助だけはいつも、みんなが帰ってしまっても、ひとりであたりが暗くなるまで、境内であそんでいるのでした。天狗はこのようすを、松の木の上からみていました。

ある日のこと、夕方になって子ども達がみんな家へかえっても大助だけはいつものようにひとり、境内でぶらぶらしていました。

これを高い松の木の上からみていた天狗が、さーととびおりてきて大助の頭の上でかくれみのの袖をぱーとひろげました。そのとたん、大助の目の前が真っ暗になりました。大助はびっくりして「うあー」と大声でさけびました。ところが全く声がでません。

「たすけて！たすけて！」大助はそこら中を走りまわりました。けれども、どこまで走ってもくらやみからぬけでることができません。大助はとうとうつかれてそこにすわりこんでしまいました。

その時、目の前においしそうなぼたもちが、皿にやまもりになってあらわれました。

そこら中を走りまわったので大助はおなかがぺこぺこでした。大助はぼたもちをひとつ食べました。あんまりおいしかったのでもうひとつ、大助はむちゅうになってつぎからつぎへとぼたもちを食べました。

さて、大助の家ではくらくなっても大助がかえってこないので心配になり父親がさがしにでかけました。「大助～、大助～」とよびながら神社の境内までくると、松の木のそばの草むらに大助がすわりこんでいました。

見ると、口のまわりには馬のくそがいっぱいついています。

「おい！大助、しっかりしろ！」父親が大助の背中を力いっぱいどやしつけました。魂が抜かれたようになっていた大助はそのとたん「はっ」とわれにかえり父親の顔をみるとほっとして「わー」と父親に、しがみついて泣きました。

それからのち、大助はどんなに遊びがおもしろくても、お日さまが西の空にしずむ頃になるとみんなといっしょに家にかえるようになりました。

村の人たちは

「天狗松の天狗が大助をこらしめたのにちがいない」といいあったそうです。この天狗松は今ではもう枯れてしまってないということです。

そうらいべったりかっちんこ

③土地ことば（福井弁）

再話　杤谷洋子（二〇一六年二月二六日）

昔のぉ、坂井町大味上の春日神社の境内に、いけえ、ふたかかえもある一本松があったんやと。ほんで、本荘の春日神社の門前には、やっぱし、いけえ、ふたかかえもある一本杉があったんにゃと。

あっ時、どっからか、天狗がとんできて、一本松と一本杉をあっちゃいったりこっちゃいったりして、ねぐらにしたんやと。ばんげしまになるっちゅうと、天狗が松の木のてっぺんで

トトン　トントン　トトントントンって、たいこをうちならいたさけんてに、みんなは、この一本松を「春日の天狗松」っていうてたんやとの。

村のぼらは大味上の春日神社の境内でいつもかもたあそんでたんやと。ぼらのおとっちゃんやおっかちゃんは

「おひさんが、西の空にしずみはじめたら、うちにかえらなあかんのやざ」ちゅうてたんやと。

ほやけどた、きかんぼでやだもんの大助だけぇは、ぼらがうちに帰ってもても、いつもかもた、ひとりだーけうすぐろうなるまで天狗松の下でうろうろしてたんやとの。

ある日のばんげしま、大助はぁ、いつものよね、ひとりだけまだ天狗松の下でうろうろしてたんやってぇの。

ほんとき、突然、松の木のてっぺんから天狗がさっと降りてきて、大助の頭の上にかくれみののそでをさーっとひろげたんやって。

ほのとたん、大助は目の前がまっくらになってもたんやと。びっくらこいて「あーっ」てさけんだんやけどた声がでん、あっちゃこっちゃ走りまわったんやけどた、いくら走ったかて、くらいとこからでられんのやと。とうとう、大介はよわってもて、ほこにねまってもたんやとの。

ほしたらぁ、目の前にうまそうなぼたもちが、大皿にいっぺーとあらわれたんやと。ほれをみたとたん、だいすけははらがへってもて、ほのぼたもちを、ひとつ、またひとつと食うてすべんとみんな食うてもたんやとの。ほれはほれは、うまーいぼたもちやったんやと。

一方ぉ、大助のうちでは、くろうなってもても大介が帰ってこんもんやさけ、心配になって、おとっちゃんがちょうちんさげてさがしにいったんやと。

「だいすけー。だいすけー」ってよばりながら、春日神社の境内までくるっちゅうと

天狗松の下に大介がボーと魂抜かれたような顔してねまってたんやって。顔をようみてみるっちゅうと、大介の口のまわりには、馬のくそがいっぺぇとくっついてたんやと。

おとっちゃんは

「おい！大介！しっかりせま！」ちゅうて背中を、どんとどづいたんやってぇの。

ほのとたん、大介は、はっと気ぃついて「わぁー」となきながらおとっちゃんに、しがみついたんやと。

ほでからっちゅうもんは、大介はぼらとあそんでてもお日さんが西の空にしずみだいたらみんなといっしょに、家に帰るようになったんやってぃの。

村のもんは

「あれは天狗松の天狗が、やだもんのきかんぼの大介をこらしめたんにゃわの」ってうわさしおうたんやと。

いまだ、春日神社の一本松も、一本杉も、のうなってもて、天狗もえんようになってもたっちゅうこっちゃ。

そうらいべったりかっちんこ

二　春江町の伝説と昔話

その1　川田のかっぱ

①原話

出典『春江の民話』「川田のカッパ―江留下―」

春江町教育委員会、一九八八年一二月

話者　前川強、再話　山田敏文

下村の川田は、芦や柳や背丈もあるヨモギが茂っていて、こすごいところじゃった。

なんでも川田の一本橋を渡るとき、男まえの若者が通るとよびとめるんじゃって、それもきれいな女の声でよばるんじゃと。ところが、若者は、ばあさんから、「川田を通るときは気をつけるんにゃざ。カッパに見込まれると縄をかけられて、水の中に引張り込まれるで、縄は木に三巻するんじゃ。そうせんと死んでしまうでの。」と、注意をきいておったと。

ある夜のこと、若者は、下村の川田を通ったと。すると、赤子のなくような声がきこえてくるんじゃと、若者は、縄がとんできたら木にくくることを考えていたと。

すると、案のじょう縄がとんできたと。急いで柳の株に縄をくくりつけたら、その木を株ごと水の中へ引っぱりこんでしもうたと。そのときカッパは、柳の枝で目をついて、それがもとで死んでしもうたんじゃと。それからはカッパが出んようになったと。

②共通語（標準語）

再話　朽谷洋子（二〇一六年五月）

昔、春江の江留下に川田というところがありました。そこは、柳の木や、背のたかさほどにも伸びたあしやよもぎが茂っていて、それはそれは、気持ちの悪いところでした

川田には、一本橋があって、そこには、かっぱがすんでいました。そのかっぱは、夜、誰かが、通りかかると、若い娘の声で

「もし、もし、おにいさん　おにいさん」とよびかけたり、「おぎゃ、おぎゃ」と赤ん坊の泣く声をきかせたりしたそうです。そこで、

「おい、だれだ、だれかいるのか」と、返事をしたりすると、縄

がとんできて体にまきつき、水の中にひきずりこまれてしまうのでした。

あるとき、ひとりの若ものが、夜になってからどうしても、川田を通って用足しにいかなければならなくなりました。

それをきいた若者のおばあさんは

「川田を通るときは、よく、きをつけるんだよ。かっぱにみこまれてしまうと、命をとられてしまうからね。縄が飛んできたら、そばの柳の木に三回まきつけなさい。そうしないと、死んでしまうからね」と、知恵を授けました。

若者がちょうど、一本橋のところまでくると、

「おぎゃぁ、おぎゃぁ」と、赤ん坊のなく声がしました。若者は、思わず、

「おい、誰だ。だれかいるのか」と、返事をしてしまいました。そして

（あっ、しまった。かっぱかもしれない）と、思っておばあさんの言ったことを思い出しました。

すると、ほんとうに、縄が飛んできたので、その縄をつかんで、そばの柳の木に三回まきつけました。そのとたん、柳の木は、メリッメリッと音をたて根っこから引きぬかれて、だぶーんと水のなかにひきずりこまれてしまいました。

そのとき、かっぱは、柳の木の枝で目を突いてけがをしてしまいました。かっぱは、その目の傷がもとで、死んでしまったそうです。それから、川田には、かっぱが、いなくなりました。

そうらいべったりかっちんこ

③土地ことば（福井弁）

再話　杤谷洋子（二〇一五年一一月・二〇一六年一一月）

昔ぃ　春江の江留下に川田っちゅうところがあったんやってぇの。ほこはぁ、柳の木やぁ、背のたかさほどにも伸びたあしやぁよもぎが茂ってて、ほれはほれは気持ち悪―いとこやったんやぁと。

川田にはぁ、一本橋があって、ほこにはぁ、かっぱがすんでたんやってぃの。ほのかっぱはぁ、夜さり、誰かが、川田を通りかかるっちゅうと、若い娘さんの声で

「あんさん　あんさん」ってよびかけたり、おぎゃ、おぎゃってねんねの泣く声をきかいたりしたんやぁと。ほんで、

「おい、だれや、だれかいるんけ」って、返事したりしるっちゅうと、縄がぁとんできて体にまきついたんやぁと。ほんで、水の中にひきずりこまれてまうんにゃあぁと。

あっとき、ひとりの若い兄（あん）ちゃんが、夜さりになってからぁどうでも、川田を通って用足しに行かんならんことになったんやぁと。

ほれをきいたぁ兄ちゃんのおばばちゃんは

「川田を通るときは、よぉお、氣をつけなはいや。かっぱにみこまれてまうちゅうと、命をしもてまうさけんてぇの。縄が飛んできたら、そばのぉ柳の木に三回まきつけるんやざ。ほうしんと、死ん

でまうさけんての」って、知恵を授けたんやってぃの。
兄ちゃんが、ちょうど一本橋のとこまでくるっちゅうと、
「おぎゃぁ、おぎゃぁ」って、ねんねの泣く声がしたんやぁと。兄ちゃんは思わず、
「おい、誰や。だれかいるんけ」って返事してもたんやぁと。ほんで（あー、しもた。かっぱかもしれん）と思ておばばちゃんのいうたことを思い出したんやとの。
ほいたら、ほんとうに、縄が飛んできたさけんてに、ほの縄をひっちゃまいて、そばの柳の木に三回まきつけたんやってぇの。ほのとたん、柳の木ぃはぁ、メリッメリッて根っこからへっこぬかれて、だぶーんって水のなかにひきずりこまれてもたんやと。
ほんとき、かっぱはぁ、柳の木ぃでぇ目突いてあやまちしてもたんやと。かっぱは、ほの目ぇのぉあやまちがもとで、死んでもたんやぁと。ほでから、川田にはぁ、かっぱはえんようになったんやってぇの。
そうらいべったりかっちんこ

その2　仏飯のご利益

①原話

出典「仏飯のご利益―姫王―」
『春江の民話』春江町教育委員会、一九八八年一二月
文　高間繁樹

昔、「姫王」の庄屋さんが急ぎの達しを隣村の「西方寺」の庄屋へ届けねばならなくなったんで、村の「歩き」を呼んですぐ行かせたんにゃと。歩きの耕作さんは夕暮近くの細い道をさっさと「西方寺」へ向ったそうな。ところが紀倍神社の長堂の大鳥居をくぐって少し行くと、大きな松の木の上の枝から、
「おい耕作、ちょつと待てえ!!」
と恐ろしく大声で呼びとめられたんにゃと。びっくりした耕作さん、思わず笠をあげて声の主を見上げると、真赤な酒呑童子のような大天狗がどかっと三叉にあぐらをかいて居すわり、耕作をにらんでいたんにゃと。全身がすっかり硬直して肝を潰した耕作さん、
「何でござりましょう。」
とおそるおそる返事をすると、天狗は、
「お前は大の相撲上手と聞く。今夕はぜひこの俺と対決しよう。」
と命令をするんにゃと。耕作は震え上がりましたが、心を落ちつけて、
「実は只今急いで、この通知を庄屋さんまで持って行かねばなりません。どうか帰り際までお待ち下さい。」
と一生懸命頼んだんにゃと。そしたらやっと天狗さんも承知をして下さって、
「ようし、わかった。ではそうしよう。早う行って来い。」
と許してくれたんにゃと。やれやれとも思い、困ったことになったなあとも思い、庄屋さんへ行ったんにゃと。
西方寺の庄屋さんは、

「おう、ごくろうさん」
とすぐ手紙を読み、
「わかった、わかった、耕作どん、日暮れも近うなったから、お腹も空いたこっちゃろう。丁度よい。家に今下げましたばかりのお仏飯がある。漬物の茶漬けで上がって行くがよい。」
といってすすめた。耕作さんは縁端で遠慮なくおよばれしたんにゃと。白いお仏飯は大へんおいしかったと。
耕作さんは、
「用心して帰れよ。」
という庄屋の声を後にして帰途についたんにゃと。
ところが、天狗との約束があるので心配で足を震わせて長堂へ歩んで行ったんじゃと。ようやく大きな松の木の下へたどりつくと、天狗は待っておったそうな。耕作はまじめな口調で、
「只今もどりました。どうぞ御手やわらかにお願いを申し上げます。」
とおじぎをしたんにゃと。ところが天狗はにったりと笑いながら、しかし大声で、
「のう耕作どん、今日の対決は止めとこじゃないか。又、日をあらためてお前と力くらべをしよう。」
と言ったんにゃと。耕作はやれやれと思ったが、不思議になって、
「なぜでございましょう。」
と尋ねますと、
「おう、今日はたとえ対決をしてみても俺の負けじゃわい。」
と言うんにゃと。
「なぜそんなことが?。」
「いやいや、おまえは先刻庄屋さんでご仏飯を戴いて来よったのう。それじゃ俺もかなわんわ。お仏飯には大へんなご利益があるでのう。」と言って取り消したんにゃと。
日暮れの道をやっと助かった思いで耕作さんは胸をなでおろし、無事家にたどりついたと。お仏飯の有難さをしみじみ思いながら。

②共通語（標準語）

再話　杤谷洋子（二〇一六年六月）

昔、春江の姫王に「歩きの耕作」という男がいました。
耕作は村の人にたのまれた仕事や手伝いをしたり、相撲がすきだったので、ひまさえあれば村の子どもたちと相撲をとっていました。
ある日、耕作は姫王の庄屋にたのまれて、隣在所の西方寺の庄屋に急ぎの言づてを届けることになりました。
耕作は西方寺にむかって、急いで歩いて行きました。途中、紀部神社があって、大鳥居をくぐり少しいくと、大きい松の木が立っていました。ちょうど、耕作が松の木のところまできたとき、突然
「おい！耕作！ちょっとまて！」と大きな声がしました。耕作はびっくりしてたちどまり、声のした方をみあげました。
すると、松の木の又に、赤い顔をした長い鼻の大天狗がすわっていて、耕作をみおろしていました。大天狗は

「おい、耕作、今からわしと相撲の勝負をしろ！」といいました。耕作はおそろしくて

（こんなでかい大天狗と相撲なんかとったら、どんなひどいめにあわされるかしらん。なんとかしてのがれんならん）と思いました。それで

「大天狗さま。わしは、今、姫王の庄屋さんにたのまれて、西方寺の庄屋さんまでいそぎの言づてをとどけに行く途中なのです。今、相撲をとることはできません」といいました。大天狗は

「そうか。わかった！それならはやく西方寺の庄屋までいってこい。わしは、おまえがもどってくるまでここでまってる」といいました。

耕作はほっとして、いそいで松の木のそばをはなれ、西方寺の庄屋の家にむかって歩き出しました。

西方寺の庄屋は

「耕作、ごくろうだったな。言づてはたしかに受け取ったと、姫王の庄屋に伝えてくれ」といいました。そして

「耕作、おまえ遠いとこを歩いてきて、さぞ腹がへったやろ。今、丁度、うちのお仏飯をお下げしたところだから、漬け物でお仏飯の茶漬けでもして食べていきなさい」といってくれました。

白い米のお仏飯はそれはそれはおいしくて、耕作は仏飯の茶漬けをありがたく喜んでいただきました。それから耕作は、姫王にむかってかえっていきました。

又、紀倍神社の松の木までくると

「おう、耕作、まってたぞ！」と、大きな声がしました。耕作が声のした方を見ると松の木の又に大天狗がすわって耕作をみおろしていました。耕作は（もう、逃れられない）とおもって

「大天狗さま。どうか、おてやわらかにお願い申します」といいました。ところが大天狗は

「なぁ、耕作。今日の相撲の勝負はやめにしよう！」といいました。耕作はほっと胸をなでおろしましたが、ふしぎに思って

「それは、また、どうしてですか？」とききました。大天狗は

「おまえ、今、西方寺の庄屋のところでお仏飯を食ってきただろう」といいました。

「はい、お仏飯の茶漬けをご馳走になってきました」

「お前はしらないだろうが、お仏飯にはそれはそれは大きなご利益がある。仏飯を食ってご利益を授かったお前といくら相撲とったってわしが勝てるわけがない。今日の相撲の勝負はとりやめだ！」大天狗はそういうとぱっと見えなくなってしまいました。

こうして、耕作は仏飯のご利益で無事家にかえりつくことができたということです。

そうらいべったりかっちんこ

③土地ことば（福井弁）

再話　朽谷洋子（二〇一六年六月・二〇一九年）

昔のぉ、春江の姫王に「歩きの耕作」ちゅう男がいたんやとの。

耕作は村のもんにたのまれた仕事やてったいをしたり、相撲がすきやったで、ひまさえあれば相撲をとってたんやとの。

ある日、耕作は姫王の庄屋にたのまれて、隣在所の西方寺の庄屋んとこに急ぎの言づてを届けることになったんやとの。耕作は西方寺にむこて、せいで歩いていったんやと。途中、紀部神社があって、大鳥居をくぐってもちびっといくと、いかい松の木が立っていたんやと。ちょうど、耕作が松の木のとこまできたとき、突然

「おい！耕作！ちょっとまて！」ちゅういけえ声がしたんやと。耕作はびっくらこいてたちどまるっちゅうと、声のした方をみたんやとの。ほいたら、松の木の又に、赤い顔した長い鼻の大天狗がねまってて、耕作をみおろいてたんやとの。大天狗は

「おい、耕作、今からうらと相撲の勝負をせ！」ちゅうたんやと。耕作はおとろしなってもて

（こんないけえ大天狗と相撲なんかとったら、どんなひどいめにあわされるかしらん。なんとかしてのがれんならん）と思たんやと。ほんで

「大天狗さま。うらは、今、姫王の庄屋さんにたのまれて、西方寺の庄屋さんとこにいそぎの言づてをとどけにいかんならんのですんにゃや。ほやで、今、ここで相撲とることはできませんのや」ちゅうたんやと。大天狗は

「ほか。わかった！ほなはよ、西方寺の庄屋んとこへいってこい。うらは、おめがもどってくるまでここでまってるさけ」ちゅうたんやと。

耕作はほっとして、いそいで松の木のそばをはなれ、西方寺の庄屋の家にむこたんやと。西方寺の庄屋は

「耕作、ごくろうやったな。言づてはたしかに受け取ったさけ。姫王の庄屋にほう、伝えてんで」ちゅうたんやと。ほでから

「耕作、おめ遠いとこを歩いてきたさけ、腹へったやろ。今、丁度、うちのお仏飯をお下げしたところや。漬け物でお仏飯の茶漬けでもしてくうていきねの」ちゅうたんやと。

白い米のお仏飯はほれはほれはうまかったんやとの。仏飯の茶漬けをいただいてまうと耕作は、姫王にむけてかえっていったんやと。

又、紀倍神社の松の木のとこまでくるっちゅうと

「おう、耕作、まってたぞ！」ちゅういけえ声がしたんやと。耕作が声のした方を見るっちゅうと松の木の又に大天狗がねまって耕作をみおろいてたんやと。耕作は

（もう、逃れられん）とおもてかんねして

「大天狗さま。どうか、おてやわらかにお願い申します。」ちゅうたんやと。ほいたところが大天狗は

「のう、耕作。今日の相撲の勝負はやめや！」ちゅうたんやと。耕作はほっと胸をなでおろしたんやけどた、なんで大天狗が相撲の勝負をやめるといいだしたんかがてんがいかんかったで

「ほれは、また、なんでですんにゃね」とたんねたんやと。大天狗は

「おめ、いましがた、西方寺の庄屋んとこでお仏飯を食うてきたやろ」ちゅうたんやと。

「はい、お仏飯の茶漬けをごっつおになってきました」
「ほやさけや。おめはしらんやろけど、お仏飯にはほれはほれはいけえご利益があるんにや。仏飯を食うてご利益を授かったおめといくら相撲とったってうらが勝てるわけがないがの。ほやで、今日の相撲の勝負はやめや！」
大天狗はほねいうとぱっとえんよんなってもたんやとの。
こねして、仏飯を食うた耕作はほのご利益で無事家にかえりつくことができたんやってえの。
そうらいべったりかっちんこ

三　三国町の伝説と昔話

その1　いけえはなし〈片羽千里〉

①原話

出典「片羽千里」
『若狭越前の民話 第一集』未来社、一九六八年四月
はなし　田中卯之助、採集　杉原丈夫

昔、大きな鳥がいました。片方の羽だけでも千里（四〇〇〇キロメートル）の長さがありました。それで世界中に自分ほど大きい鳥はいないだろうと思って、得意になってゆうゆうと海の上を飛んでいました。そのうちに少し疲れたので、海の中にはえている大木の枝に止まって休んでおりました。
ところがその大木は、エビのひげでした、エビは、
「なんだ、人のひげに止まってくすぐったいや」
といって、大きい鳥をはね飛ばしました。
今度はエビが、
「世界一の大きい鳥でもあの程度だ。世界中におれほど大きいものはいないだろう』
と、大いばりで海の中を泳ぎまわりました。そのうちに少し疲れてきたので、大きな洞の中へはいって休みました。
ところが、それはアカエイの鼻の穴でありました。アカエイは、
「ぎさまは何だ。ひとの鼻の穴の中にはいって。こそばいぞ」
といって、エビを吹き飛ばしました。
エビはびっくりして、それからは腰が曲ってしまいました。またエビをえさにしても、アカエイが釣れないのはこのためですと。

②共通語（標準語）

再話　朽谷洋子（二〇一六年六月）

昔、あるところに、大きな大きな鳥がいました。その鳥は片一方の羽の長さだけでも千里もありました。そこでいつも
「おれは世界でいちばん大きい鳥だ」と得意になっていました。
あるとき、鳥はいつものように得意になって海の上を飛びまわっていました。そのうち、少しつかれてきたので、海の中からつきで

ている大きな木の枝に止まって休みました。「いいところに木の枝があった。ここでひとやすみしよう」

ところがそれはえびのひげだったのです。えびは

「だれだ！人のひげにとまるやつは、なまいきなやつだ！」とさけんでひげを振り回して大きい鳥を跳ね飛ばしました。

それから今度は、えびが

「おれは、世界一大きいといばってた鳥をひげのひとふりで飛ばしてしまったんだ。世界中でおれほど、大きいものはいないだろう」とおおいばりで、海の中を歩き回っていました。すると、大きな祠がありました。えびは少し疲れたのでこの祠に入って休むことにしました。

ところが、それはアカエイという魚の鼻の穴でした。アカエイは

「おまえはなんだ！人の鼻の穴の中にはいって！こそばいじゃないか！」というなりえびをふーんと吹き飛ばしてしまいました。

えびは吹き飛ばされて腰を打ち、それから腰がまがってしまいました。それ以来、えびをえさにしてもアカエイはつれないのだそうです。

③土地ことば（福井弁）

再話　朽谷洋子（二〇一六年六月・二〇一九年二月）

昔のぉ、あっとこに、ひどもにいけえ鳥がいたんやとの。ほの鳥は、かたっぽの羽をひろげただけでも、千里もあったんやぁと。ほいで、

「どうや、うらはぁ、世界で一番いけえ鳥やろや」って、いつもかもたえばってたんやとの。

あっとき、鳥はあ、いつものよね、えばりくさって海の上をとびまわってたんやと。ほのうち、ちびっと、よわってきたさけ、あたりをみるっちゅうと、海ん中からいけえ枝をのばいた木がつきでてたんやぁと。鳥は

「いいとこに、木の枝があったざ。ここで一休みしっか」ちゅうと、ほの枝にちゃまってやすんだんやとの。

ほいたところが、木の枝やとおもたんはいけええびのひげやったんやと。えびは

「だれや、わがのひげにちゃまったやっちゃ！」ちゅうておこるっちゅうとひげをぶるんとひとふりして、ほの鳥をふりとばいてもたんやと。

こんだ、えびが、

「うらはぁ、世界で一番いけえってえばってた鳥をぉ、こんひげひとふりで、ふりとばいてもたんや。世界中でうらんたないけえもんはえんやろ」ちゅうと、そっくりかえって、海ん中を歩きまわってたんやと。ほのうち、えびはぁちょこし、よわってきたさけんてに、あたりをみるちゅうと、いけえ、洞があったんやとの。えびは、

「このぉ、洞ん中にもぐりこんでひとやすみしっか」ちゅうと祠んなかにもぐりこんだんやと。

ほいたところが、ほれはぁ、アカエイっちゅう魚のぉ鼻の穴やったんやといの。アカエイは

「おめはなんや！人ん鼻ん中にはいって！こそべーが」ちゅうなり、えびをふーんとふきとばいてもたんやぁと。

えびはぁ、吹き飛ばされて、腰うってもて、ほんで、腰が曲がってもたんやぁと。

ほでからはぁ、今でも、アカエイをつんのに、えびをえさにしてもぉつれんのやといの。そやってこっちゃあ。

そうらいべったりかっちんこ

その2　「おはるきつね」

①原話1

出典「おはる狐」杉原丈夫

（『南越民俗』創刊号　一九三七年七月一日、復刻版一九七五年八月）

三国の商人が川西に用事があって行く。おはる狐にだまされぬようにとの友人の忠告を小馬鹿にして、意気揚々とやってくると、一匹の狐がスッと前を横切って草むらへはいる。

だまされぬぞとおもって眉に唾をつけて見てみると草むらの中に沢山の狐がいて殿様行列にばける。その行列がやがて向こうから下におれ、下におれとやってくる。

商人がうまく化けたものだと感心してみているとそれは本物の行列であって、商人は行列の前にたちふさがっていたいうかどで、しばられて奉行所へ連れていかれる。

狐にだまされたのだからかんにんしてくれと言っても許されず、ついに打ち首というところを、檀那寺の龍谷寺の住職のとりなしで、頭を剃って一生坊主になるという条件で、ようやく命だけ助けてもらう。

頭をそられて平身低頭してあやまっているところを、付近の百姓に見つけられ、気がついた時は自分はもとの大道にいたという話である。

①原話2

出典『若狭越前の民話 第一集』「おはるきつねばなし」第一話

未来社、一九六八年四月

はなし　伊藤米太郎、採集　杉原丈夫

三国町の新保町に灌頂寺（かんちょうじ）というお寺があります。そこに「おはる」という名のきつねが住んでいました。人をだますことがじょうずで、だまされまい、だまされまいと思っているうちに、いつのまにやら頭をまる坊主にされてしまうのですと。

三国の商人（あきうど）が商用で川西へ行くことになりました。出かけるとき、友人たちはおはるきつねにだまされぬようにと忠告しました。だがそんな話をばかにして歩いていると、一匹のきつねがスッと商人の前を横切って、草むらへはいっていきました。

いよいよ出て来たな、だまされんぞとりきんで、まゆにつばを付

けて見ていました。すると草むらの中にたくさんのきつねがいて、殿さま行列に化けました。やがてその行列は

「下におれ、下におれ」

といいながら、向こうからやってきます。商人が、うまく化けたものだと感心して見ていると、それは本物の行列でした。

商人が行列の前に立ちふさがっていたのは無礼だというので、縛られて奉行所へ連れていかれました。きつねにだまされていたのだからといい訳をして、勘弁してほしいと頼みましたが許されません。ついに打首ということになり、まさにあぶないところを、だんな寺の滝谷寺の住職のとりなしで、

「頭をそって、一生がい坊さんになる」

という条件で、やっと命だけは助けてもらうことになりました。

商人は、

「申しわけありません、ありがとうございました」

と、ひらあやまりにあやまっていました。その頭をそられたかっこうを付近にいた百姓に見つけられ、きつねにだまされていたことに気が付いたときは、自分はもとの大道にひざまずいていましたと。

②共通語（標準語）

再話　杤谷洋子（二〇一六年六月）

昔、三国の新保町に灌頂寺（かんちょうじ）というお寺がありました。そこに「おはる」というきつねが住んでいました。おはるきつねは、人をだますことがとてもうまくて、だまされまい、だまされまいと思っているうちに、いつのまにかだまされて頭を丸坊主にされてしまうのでした。

あるとき、三国の商人（あきんど）がひとり、新保を通って川西に商いにいくことになりました。みんなは

「おはるきつねにだまされないよう、よくよくきをつけていくように」と注意しました。

商人は（なーに、自分は絶対にだまされたりしない）と思いながらあるいていきました。

すると、いっぴきのきつねが、スッと目の前を横切って、道の端の草むらにはいっていきました。（いよいよでてきたな）と思って、そうっと草の中をのぞいてみました。すると、草の中にたくさんのきつねがいて、みんなで殿さまの行列に化けると、

「したにーしたにー」といいながらすすんでいきました。商人は行列がみえなくなるまで、そこにたってみていました。

はっとすると、今度はむこうのほうから

「したにーしたにー」と声がして、殿さまの行列が商人の方へやってきました。商人は（うまいことばけるものだな）と思いながらそこにぼーっとたってみていました。行列は、商人のそばまでくるとぴたりととまっておとものさむらいが

「ぶれいもの」といって商人をつかまえひもでしばってしまいました。（しまった。これはほんとの殿さまの行列だったのか）と思ってあわてて

「わたしは今、草むらできつねが殿さまの行列に化けるのをみたのです。だからてっきり、きつねが化けた行列だと思ってました。わたしは、きつねにだまされてしまったんです。どうか、おゆるしください」とあわててていいました。だけど、聞き入れてもらえず奉行所につれていかれてお裁きをうけることになりました。

殿さまの行列のじゃまをしたということで打ち首になることがきまってしまいました。商人はいっしょうけんめい

「わたしはきつねにだまされたんです。どうかゆるしてください」と、なんどもなんどもたのみましがきいてもらえません。

そのとき、滝谷寺のぼうさんがやってきました。坊さんは商人の顔をみると

「この男はうちの寺の檀家のものです。今、ここで頭をそって坊主にし、一生、うちの寺で修行をさせますから、どうかゆるしてやってください」といってたのんでくれました。

そこで、やっとゆるしてもらうことができました。坊さんはさっそく商人の頭をそって坊主にしました。.商人は頭を地面にこすりつけて

「ありがとうございました。ありがとうございました」と何度もお礼をいいました。。

そのとき

「おい！どうしたのだ」と言う声がして、だれかがせなかをドンとこづきました。はっとして顔をあげてみると、そこは、はじめにきつねを見たあの道のまんなかで、商人はきつねにだまされて頭をそられてすわっていたということです。

そうらいべったりかっちんこ

③土地言葉（福井弁）

再話　朽谷洋子（二〇一六年六月・二〇一九年二月）

昔のぉ、三国の新保に灌頂寺っちゅうお寺があったんやとの。ほこに、おはるってなまえの狐がすんでたんやとの。おはるきつねは、ほれはほれは人をだまかすのがうまかったんやと。

（だまされんとこ、だまされんとこ）って思ってるうちに、いつのまにかだまされてもて、頭をつるつるにしられてもてるんやとの。

あっ時、三国の商人（あきんど）がひとりで、新保を通って川西まで商売にいくことになったんやと。なかまうちのもんはみんなして

「おはるきつねにだまされんように、よーお、きいつけていきなはいや」ちゅうたんやと。商人は

「うらは、ほんなもん、だまされたりせんわ」ちゅうてどんどんあるいていったんやっての。

ほいたら、目の前をきつねがいっぴきさっと横切って、草ん中へはいったんやと。

「あ、いよいよきたな」とおもて、そーと草んなかをのぞいてみたんやと。ほいたら、草ん中にようけときつねがいて、みんなして殿さんの行列にばけたんやと。ほいて

「したにー、したにー」ちいながらすすんでいったんやと。商人は行列がみえんようになるまでほこにたってみてたんやとの。はっとするちゅうと、こんだむこうのほうから
「したにー、したにー」って声がして殿さんの行列が商人の方へやってきたんやと。
商人は（うまいことばけるもんやな）とおもいながら、ほこにぼーとたってみてたんやと。行列は商人のそばまでくるとぴたっとまって、おとものさむらいが
「ぶれいもの」ちゅうなり商人をひっちゃまいてへぼでくくってもたんやとの。
商人はびっくらこいて
（しもた。これはほんとの殿さんの行列やったんか）とおもてあわてて
「うらは今、ここできつねが殿さんの行列にばけるのをみましたんや。ほんで、きつねが化けた行列やとおもってましたんや。うら、きつねにだまされてもたんですんにゃ、どうか、かんねしておくんなさい」ちゅうたんやと。ほやけどきいてもらえんで、奉行所につれていかれてお裁きをうけることになったんやと。
殿さんの行列のじゃまをしたということで打ち首になることがきまってもて商人は一生懸命
「うらはきつねにだまされたんや。どうかかんねしておくんなさい」ってなんどもたのんだんやけどきいてもらえん。ほんとき、滝谷寺の坊（ぼん）さんがやってきたんやと。坊さんは商人の顔をみると
「この男はうちの寺の檀家のもんです。今、ここで頭をそって坊主にします。一生、うちの寺で修行をさせますさけ、どうかゆるしてやってください」とゆうてくれたんやとの。ほんでやっとゆるしてもろたんやと。坊さんはさっそく商人の頭をすって坊主にしたんやと。商人は頭を地面にこすりつけて
「ありがとうござんした。ありがとうござんした」となんべんもお礼をいうてたんやと。
ほんとき
「おい！どうしたんや」ちゅう声がしてだれかがせなかをドンとこづいたんやと。はっとして顔をあげてみると、ほこははじめにきつねを見たあの道のまんなかで、商人はうまいこときつねにだまされてもて頭をそられてほこにねまってたんやといの。
そうらいべったりかっちんこ

参考書籍

『昔話入門』小澤俊夫編著　ぎょうせい、一九九七年
『こんにちは、昔話です―小澤俊夫の昔話講座』小澤俊夫著、小澤昔ばなし研究所、二〇〇九年
『昔話の語法』小澤俊夫著、福音館書店、一九九九年